

学 位 論 文 題 名

# 大伴家持研究

## －長歌作品の方法－

### 学位論文内容の要旨

本論文は、万葉集後期を代表する歌人大伴家持の活動時期のうち、作歌活動の円熟してくる越中時代と、それに続く帰京後の作品を対象とするもので、これらの時期を通じて、或る種の「転換期」にあって制作されたと思われる長歌作品を考察の対象として、その長歌作品としての方法や意義について論じたものがある。家持の長歌作品の方法、とりわけその構成原理については、いまだ十分な究明がなされてはいないといってよく、この問題に「転換期」とそれへの対処という視点を導入した新機軸の家持論である。

序章では、本論文の分析対象として、家持が長歌の構成の原理としての叙事性を明確に意識した時期の作品を研究の対象とすること、また、越中時代ではその節目、あるいは転換期に位置する代表的作品を、一方帰郷後では天平勝宝七歳（七五五）の防人歌と深くかかわっている長歌作品に限定して考察対象とすることを述べる。分析の対象とした作品は必ずしも多くはないが、従来研究の十分に行われていない作品に挑んだ意欲的な目標設定である。

第一部では越中時代を適応期以前、適応期、追懐期というふうに分けて三期に区分して考察する。

まず第一章では、越中時代における最初の転換期、すなわち越中の風土への適応期に制作されたと思われる「二上山賦」を検討の対象とする。左注によるとこの作品は「興に依りて」作られたとされているが、氏は同時期の家持作品を広く精査し、家持がいわゆる歌日誌という方針を維持しつつ、時々歌の流れの上からは外れる傾向の作品を制作するとき、それを示すために意識的に「興に依りて作る」という説明を付したのではないかと推測する。先行研究を発展させた妥当な結論である。

続く第二章では、家持にとって第二の転換期が、天平勝宝二年（七五〇）三月～五月頃訪れたと推定し、その時期は国守としての任期が終わりに近づき、作品制作の上で越中生活を思い返す傾向が濃厚な時期だったのではないかと見る。そして、この時期に家持は越中生活を回想する作品を頻りに作り、結果的に多作・豊饒の時期を迎えたと指摘している。この追懐期、という把握は従来の研究には見られないユニークなもので、越中期の家持を考える上で一つの問題提起たり得るものである。

前章を承けて、第三章では具体的に、追懐期の二長歌作品「白き大鷹を詠む歌」と「鵜を潜くる歌」を扱い、それらの作品には一種の時間操作が行われていると見る。具体的には、これらの作品が、天平勝宝二年三月八日といった実際の〈今〉＝制作時点とは次元が異なる過去の時点、すなわち越中初期の単身赴任中の〈今〉の設定によって作

られているとする。作品内の時間と制作時とを区別するという鋭い分析の視点からの斬新な見解といえる。

さらに、第四章では追懐期のもう一つの作品、「池主に贈る霍公鳥の歌」と、これに続く「水鳥を池主に贈る歌」とを扱う。越前掾に転じた池主に贈ったこれらの作品には諧謔的な表現が目立つが、氏は、家持が諧謔表現を用いた理由は池主を笑いに誘うことによってかつての同僚にして心を許す歌友である池主を慰めるためだったと指摘する。

一方、第二部では、帰京後の家持にとって、天平勝宝七歳の、難波における東国諸国から集結して来た防人らとの出会いが、作歌上のおおきな転機をもたらしたのではないかと推定する。

そこから、防人歌群の間にはさまる形で歌い継ぎによって制作された三つの防人関係家持長歌作品に対象を絞って、これを有機的に結びついた連作的な作品群として捉え、そこにおける構成意識のありかたについての考察を行なう。

まず第一章では、家持がこの作品の制作にあたって、悲別の情を効果的に作品化するために用いた方法がどのようなものであったかを検討する。そして家持が先行の「七夕」作品において創出された叙述の転換の方法、すなわち第三者的立場から歌いはじめて当事者的立場で結ぶという詠法に目を向け、それを継承して防人の悲別をテーマとした長歌作品群を作りあげたと指摘する。

これを承けて第二章では、この叙述の転換によって、当の長歌作品群のうち、第二、三作は集約的「家」（＝家族）の表現を獲得するに至ったことを論じ、それが他の万葉歌人たちには見られないユニークな表現であり、これによって歌群が有機的に結び付けられているとする。また、家持の同様な構成意識は、第三作の反歌四首による構成にもおよんでいることを検証する。

第二部では、第一部に比して作品の分析がより詳細で、しかも全体として長歌作品の構成原理に焦点をあわせている点が評価できよう。

なお本論文の構成の概略は以下のとおりである。（400字詰原稿用紙換算約337枚）

|                                         |     |
|-----------------------------------------|-----|
| 序章                                      | 1   |
| 第一部 越中時代                                |     |
| 第一章 適応期の作品―「二上山賦」                       | 14  |
| 第二章 追懐期―天平勝宝二年三月～五月                     | 34  |
| 第三章 追懐期の作品―その一、「白き大鷹を詠む歌」と「鵜を潜くる歌」      | 50  |
| 第四章 追懐期の作品―その二、「池主に贈る霍公鳥の歌」と「水鳥を池主に贈る歌」 | 61  |
| 第二部 帰京後                                 |     |
| 第一章 防人関係長歌作品 その一                        | 75  |
| 第二章 防人関係長歌作品 その二                        | 88  |
| 結章                                      | 99  |
| 付記                                      | 103 |
| 引用文献一覧                                  | 104 |

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 身 崎 壽

副 査 教 授 須 藤 洋 一

副 査 教 授 後 藤 康 文

学 位 論 文 題 名

## 大伴家持研究

－長歌作品の方法－

審査委員会は、本論文が提出されて以後たびたび委員会を開催し、申請論文を慎重に精読・審査し、また口述試験を実施して、十分に審議を重ねて適正な評価に努めた。その結果、以下に述べるような本論文の評価に鑑み、全員一致して、朴相鉉氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当である、との結論に達して、研究科教授会に報告した。研究科教授会はこの報告に基づき審議を重ねて、これを承認したものである。

本論文は大伴家持の作歌活動の円熟してくる越中時代以後の作品のうち、或る種の「転換期」にあつて制作されたとされる長歌作品を考察の対象として、その作品の方法や意義について論じたものである。

本論文の成果の一つは、越中にあつて作歌活動の活発化した天平勝宝二年（七五〇）三月から五月の時期について、これを「追懷期」として捉えるという観点を提示した点である。国守としての任期が終わりに近づくとされていたこの時期、家持は越中生活を思い返し、回想する作品を多く制作し、その結果多作・豊饒の時期を迎えたというもので、従来の研究には見られなかった把握のしかたとして、家持研究に一定の寄与をするものと期待される。

もう一つの成果としては、従来、十分な検討が行われていない三つの防人関係家持長歌作品について、これを有機的関連を持ったひとつの作品群と見る立場から、その構成意識を詳細に検討している点に求められる。

また、これらの作品の分析にあたって、作品中の「今」と制作時点としての「今」を区別するという視点、あるいは、防人の悲別の情を表現するために用いられた叙述の転換一すなわち第三者的立場から歌いはじめ、当事者的立場で結ぶという詠法一に着目し、その起源を七夕歌に求めるといった視点など、随所に新機軸を打ち出している点も評価できるとされる。

一方、問題とすべき点としては、抽出した対象作品が家持の作歌活動の全体像を代表し得るものだと根拠、あるいは見通しを十分に示し得ていない点、また、第二部の論考に比べ、第一部の諸論考は、制作動機の解明という面はともかく、「長歌作品の方法」の解明、という論文の趣旨から見た場合、作品分析という点で未だしの感もある。これらの点に関しては今後も同氏が取り組んで行くべき課題であろう。しかしながら、本論文を通じて家持研究を深化させる糸口はつかめたものと判断される。また第二部で展開した分析の手法は、広く家持長歌作品の構成原理の解明に資するものと思われ、今後故国で研究の第一線に立ってこの研究を推し進めて行くことが期待される。

なおまた、よくこなれた日本語による安定した文体も、留学生としては出色のものと評価できる。